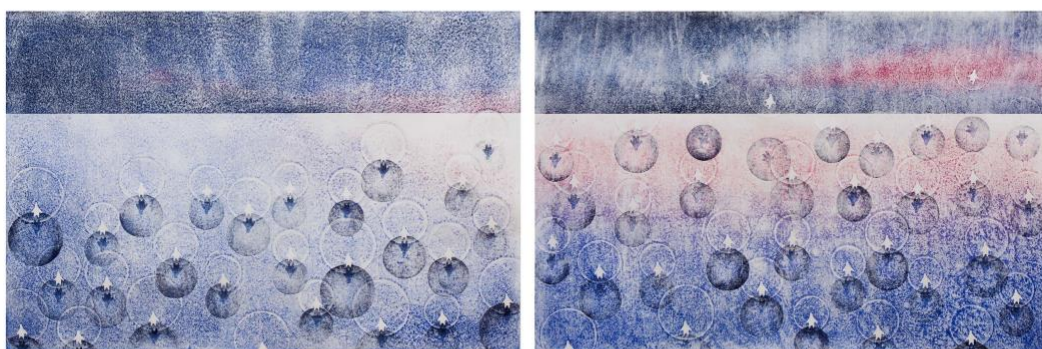
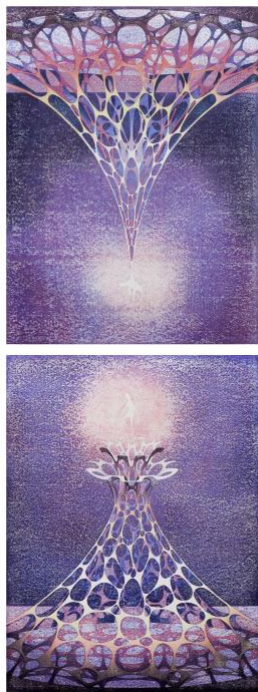


周 可
ZHOU Ke



みさだめる/ひきあう
木版画、和紙

みさだめる/ひきあう

時に離れ、時に近寄る。お互いの距離を測りつつ、自分でいられることを維持できるためのバランスを見出して保とうとする。目の前に立つ人々が映り込む心の中にある水面を見つめ、自分と他人の間に無きに等しい距離が確かに存在していることに気づく。暗黙のうちに、この気付きは他人も感じ取っている。

現在の作品制作は、個々の間にある目に見えない「関係」を個人の表現方法で形のあるものにするを目的として行っている。人々は常に様々なきっかけによってつながっている。多種多様な人と文化が交わっている環境にいるからこそ、お互いの差異がより鮮明に見え、距離感を覚える。しかしながら、かけ離れることだけではなく、些細なことを機にお互いが惹かれ合う場合もある。異なる軌跡を沿って現在の自分にたどり着いた人々は、気付かずに似通う問題と思考を抱えていながら同じ時の流れの中に歩んでいる。この概念を作品を通して、観者に形のないつながりの存在を気付かせることが現在の制作方向である。

私の作品は、水性木版の朦朧とする色表現とデフォルメされた人型の使用を重視して制作されている。人間の身体をモチーフとして選んだものの、頭部、胴体、四肢をわかる程度に描写し、目や指などの強烈に人体を示唆するディテールを避け、オーガニックな形に近い存在に仕上げる。その上、漂う不安定さと繊細さを連想させる「水の中に浮かぶ情景」や「泡」、身の回りを映り込む「水面」などの自然要素と融合させ、抽象的な画面表現を目指している。観者に各々が感じ取った「つながり」を直接想起させるために、作品に使うモチーフをなるべく曖昧模糊に保ち、はっきりとするイメージに注意を移せないようにしている。観る人に自身の体験と結びつく「手間」を残し、つながりの存在を発見させる緩やかな過程を再現できるのかを試みている。修了制作である2点の作品は、以上の要素を基にして、「周囲や自身との照らし合わせ」を主軸として構想されたものである。「みさだめる」は、人々の間に存在する距離を泡で表現し、それらに包まれた小人たちは、砕けた氷面から映り込む反対側の存在をкаろうじて見ようとする情景を表している。「ひきあう」は、様々な要因によって身動きが取れなくなった一人と、すべてを切り離そうとするもう一人を対照的に描写し、異なる二人による自分でいられるための「バランス」を表している。このように複雑でありながら単純ともいえる環境の中から生まれた自身と他人との「関係」は、いかに繊細で儂いものであるかを方向性とし、作品を通して発信していきたい。